



落式大令女くた
腰解
悦



一樹の蔭

水野 仙子

「では大事にしておいで。」と其言葉の尾を優しい目付きに引いていよ／＼夫は東京へと歸つて行つた。

九月の残暑はまだ盛んに熱い風を病室に送つて居た。私の心は漸くその頼るものから離れると、自分の心の落着所を作る爲めに、現在の自分をよく見極めようとし初めた。私は先づ吾が額の上に迅速に解けて行く氷の囊の壓迫を意識し、腹部の熱感と膨脹との苦痛を感じた。さうして思はず吐く溜息の熱いのを知つた。私は一昨日こゝに入院した——と私は最近の出来事から回想を初めて行く。肋膜炎の後と幾らか肺炎加答兒の氣味とを持つて、醫者の進めに委せて歸國したのは二ヶ月ばかり前である。其間に何が起つたのか、焦慮と、忍び足に進んで來た病勢と、ヒステリーのやうに時々泣く事と、併し其度に静かな諦めの心の上にやがてこの希望を築く事と、さうして運命は遂にかうした田舎の病院に入るべく私を驅りたてた。今は更に腹膜炎を加へ、ラッセルは左右の胸の至るところに聞かれる——。さうしてそれは嘘でもなく夢でもなかつた。身動げば氷囊が退れ、體內と外界とから來る熱に汗ばんだ肌が氣持わるく寐巻にねばる。しかも總ては堪え忍ばなければならない。生か死か、この後の一日／＼を注意深く吟味して行かなければならない。救ひはたゞ我が心の裡にのみ探し得らるゝ、忍べ、さうして心靜かに視よ！と私の心は命ずる。私は私の心臓に依頼し感謝する、何故なれば彼はいつの間にか——恐らくは惱めるが故に——神を知り、神が萬民に約束し給ふところのものを彼も亦結んだ

やうに見えるから。たゞそれは生に於てか、或はまた死に於てか？

何はとまれ、現在自分が斯くある事を認める以外に、何處に私は私の落着きを得ようがあらう？たとひ魂は其爲めに沈み切つてゐるとしても。

さて私は眼を轉じてこの不思議な病室を見廻した。部屋は階上の十五疊敷ほどの廣さで、押入もなく、床の間もなく、天井の真中に丁度お湯屋の息抜きさのやうなものが列つてあつて、それが一昨日から私は初めて小學校に上つた時の教室を度々思ひ出させるのであつた。もと／＼こゝは病室に作つたものではなく、看護婦溜りなどに用ゐてゐたのを、臨時に我々のために病室の備へをしたのであつた。郡立の病院といふ所から附近の信用もあり、旁々最も病人の多いのが普通な夏の事だつたので、病室は空かぬ前から約束で決められて行くやうな有様だつた。で私も亦當分はこゝで他の室の空くまで我慢しなければならなかつた。さういふ意味でまた一方待合室とでもいふやうな感じのするところへ、私と共に三人の女の患者が枕を揃へてゐる。蒲團と蒲團は僅かに二三尺を隔て、敷かれ、附添人の夜具や何か、ごた／＼隅の方に押し寄せられてある。さうして時折の溜息と、咳と、咳きとは入り交つてこの部屋に一つの空氣を作る。二人は殆ど同時に、私より一日後れて昨日の午後に入院した人達であつた。それにも係らず二人は今日は既にもう古い知己の如くに語り合つてゐる。それは二人が思ひもよらず東京辯で話する事が嬉しかつたのと、田舎病院の間の抜けた設備と待遇とに對して散々溢した揚句、「東京ぢやあねえ。」

「ねえ！」と何かにつけ東京を引張り出しては同感し合ふ事によつて共同の考へが持てるからであつた。

二人の中の一人は廿二三の（併し彼女に言はせれば二十といふ事であつた）恐ろしく背の高い



選挙注意事項

細月重信を
楊枝をつく

註釋を加

へて貼出さる

有振者曰ク
牛も首も細めて

一樹の蔭（水野仙子）



山賊の張本
カラシザ
墨大統領
となる

女で、或は瘦せてるが爲めにさう見えるのかも知れないが、旨味も曲線もなしにたゞ伸びて行つたやうに見えた。赤いものゝ入つた帯や、長い袖の派手な浴衣やで、どうかして若々しく水々しく見せようとしてゐるにも係らず、青黒いしやくれた顔には唇に至るまで其本来の色を失つて意地悪く青春を裏切つてゐた。低い鼻の上にざろりと人を見る眼は、時として詰るやうな反抗的な感じを人に與へ、さうして其眼に年の割に苦痛といふものを知つてゐるやうに見えた。それだけ、年増な感じと、何處となく卑しげな表情をさへ添へてゐるのであつた。

彼女は母親に附添はれて來た。母親はどうやら娘に傳へた面影の或部分を保つてはゐるが、血色もよく人相もにこやかで、遙に娘よりは自然な女性味と穩かな人柄とを示して居た。外に大聲を出す百姓が一人、夜具や手廻りの道具やらを運んで來たが、母親はそれに對して勝手のいゝ土地言葉を使い、私達にはアクセントはともかくとして可なり馴れた東京言葉でものを言つた。この人達は多分此近在に生れたので、家族と共に東京で暮してゐたのを、娘の病氣の爲めに母娘して田舎へ歸つて來たのであらうと私は察した。實際彼女の顔色を一目見れば、略ぼ今如何なる状態にあるかといふ事が會得された。彼女は私のに並行させて寐床を敷かせた。顔と顔の間には私の家から運んだ簾屏風がたてられて、私にはそれが幾らかの平和を支へてくれた代りには、初めから三人の間にある感情の垣を作つたやうな氣がしてならなかつた。彼女は昨夜恐ろしく咳き入つてゐた。さうして私は其つど目覺まされて、一晚中寝入るひまもなく明した。今朝になつて彼女は、顔を洗はうと床の上に起きかへつた私に、

「そちらの奥さん、昨夜はお寐みになれなかつたでせう、私があんまり咳をするのだから。」と初めて言葉をかけた。

「いゝえ、でも随分お苦しうでしたわねえ。」と私は、眠れなかつたのを誰かの科でゝもある



人々の
春

百題

かのやうに考へて幾らか不平を抱いてゐたのに氣付いて耻ぢつゝ答へた。さうして彼女の眼付きのうちに、(でもそれは私のせいぢやないんですわ、私は咳をしたと思つてするんぢやないんですもの。)といふやうな意味のあるのを讀んだ。

(あの人は自分の病氣について絶えず何者かに向つて挑んでゐる?)と私は思つた。さうして私はその矢面に立つのを避けるかのやうに後の言葉を切つた。

一番向ふの端にゐるもう一人の女は、彼女に比して又何といふ簡単な顔をしてゐたらう。如何さま病人らしく寢れてはゐるけれども、鼻筋の通つた稍々面長の顔立で、遠慮もなく人を見る眼には、隠さうつて隠せないやうな單純さが、しかも可なり有効にものを言ふに馴らされてゐる。素直な毛を無造作にひつつめてはゐるが、粗末な浴衣に銘仙か何かの襟のせまい半纏をひつかけてゐるあたり、何處やらたゞの者とは初めから見えなかつた。一緒に來たといふよりは、彼女を連れて來た宿屋の女將らしいのが、申譯のやうに一つ二つ世話を焼いて歸つて行つたあと、暫くは寢もやらずにぼつねんとしてゐたやうだつて、すぐに隣りの母娘を對手に話を初めて、長い事胃病で苦んでゐる事や、其癖喰ひしん坊で喰べたくてく仕様がなく、つい喰べ過しては四十度も熱を出して苦しむのだといふやうな事を大袈裟な面白さうな調子で話してゐるのだつた。あらゆる土地と人と場合とに馴染み易く、又馴れ易くもある人の常として、彼女は如何にも樂に人の前に自分を置いてゐるやうに見えた。

「え?何ですつて?三十六ですつて?まあ可哀いさうに、幾らなんでもねえ!」と今し方體溫を取りにはいつて來た看護婦が、年齢を十違へて書き入れてあつた溫度表を院長が見て、それにしては若いと言つたといふ話をする、彼女は大袈裟に「まさかねえ」を繰り返して悄氣て見せた。しかも明かにさうした間違ひと院長の注意とにある満足と悦びを感じながら。



「これでもねえ、少しおしやれでもすりや、そりや幾ら私でもねえ……」と彼女は、賄ひから出た薄つべらな白い蒲團にくるまりながら言ひかけると、丁度其時八木さんが（今看護婦がさう呼んだ）烈しく咳き出したので、話はそれなりに切れてしまつた。

珍しくひつそりとした間だつた。入口にかけた簾垂れを颯る風が、調子をとつて其裾を引いたり入れたりしてゐる。暫くすると突然八木さんが口を開いた。

「貴女はなんていふ名前でしたの？」

それは丁度何か彼女が今まで考へてゐた事の續きのやうな言葉だつた。彼女は私に背を向けて横になつて、向ふの女と顔を合せて居た。

「え、名前？」と向ふでは吃驚したやうに半身を起しかけたが、その質問が飲み込めると、急に活々とした顔付きになつて、（彼女は部屋の中に言葉がないといつも恐ろしく退屈さうに見えた。）

「小雛つていひましたの。」

私はふと耳をそばだてた。

「小雛？さうですか、可愛いらしい名前ですわねえ。」

「え、そりあね、今こそこんなですけれども、もとはねえ、出たばかりの時は雛ちゃんに可愛いか何とか言はれたものですわ、それにもとから甘いもの好きの喰ひしん坊で罪がない方だつたもんですからねえ、お客様もねえ、そら小雛お土産をやるよつてよくねえ、お菓子なんかを買つて来て下さつたもんですよ。ほんとに雛ちゃんには甘いものさへあづけて置きあ何にも要らないんだからつて、よく姐さんに笑はれたものでねえ、だから……」

彼女の話は傍から圍むをたてないと、幾らでも脇道から脇道へと移つて行くやうな調子のものだつた。



「幾つてお出になつたの？」

「十四の時よ、だからねえ、私さう思ふんですよ、私のやうに十四の時から親を養はなけりやならないなんてねえ、全く可哀いさうですよねえ、だから私貴女がお母さんにさうしていろいゝ世話を焼いて貰つてらつしやるのを見るとほんとに美しいんですよ。私の親はねえ、子供の時はそりやほんとに可愛いがつて呉れたんですけれども、（眞實の親ぢやないですよ、私里子に預つてね、貰はれてしまつたのよ）其頃は家がよかつたから、（煙草屋だつたのよ）立派に暮してましたからねえ、私も可愛いがられて育つたんですけれど、家が惡くなつてからはねえ、矢張り私をお金にしようと思つてね、そらもう慾が出て來たんでしょ、私随分酷い目に遇ひましたわなんだつて貴女、十四の時からずつと親を養つて來たんですもの、ですから……」

「まあさうですか、豪らござんすわねえ、私なんか此年になつてまだお母さん／＼つてねえ、世話焼かしてゐるんですもの、心配ばかり掛けましてねえ……」

「え、／＼さうですとも！それなのに私なんか……」十四の時から、といふやうに今は彼女はやをら身を起して枕を膝に抱へた。

「随分是迄貢いで來ましたからねえ、私が初めの旦那に落籍された時なんか、月に五十圓づゝもねえ貴女、親の方へ仕送りして頂いたんですもの、兜町の旦那でしてね、そりあ私も其時分は豪勢に暮してましたわ、今こそこんななんですけどもねえ、暢氣でしたわ、落籍祝ひのなんだつて其時には姐さん方にお召を一反づゝねえ、そりや立派にして貰つたもんですわ、それに……」

「ちやどうしてまた貴女、こんな田舎になんぞいらしたんですか？」

八木さんはいつも疊みかけるやうに言葉を挟んだ、そして思ひなしか其調子は何だか皮肉な

ふの花や
又旅に出る
旅役者



やうに私には聞えた。
「そりあねえ、かうなんですよ、黙つていらつしやいよ。」と、其時遠くから注いでゐた私の眼に氣付いて「黙つてゝ頂戴よ。」と念を押しながら、その癖ちつとも自分で其言葉を重んじてゐないやうな調子で、しかも何時誰にでも「黙つてらつしやいよ」といふ前置きで繰返されるのであらうと思はれる話をしだした。

彼女は其兜町の旦那が失敗してから、(だからもう私相場師はこり／＼と言つて居る)今度は數寄屋町に(最初は芳町だつた)二度の勤めて現はれたのを、此土地の或人に落籍されたといふ事だつた。併し其人は前の旦那程金持でもなく、又別段深い仲でもなかつた。たゞ友達とのいきさつからそんな譯になつたので、立派な妻子もあれば、手當だとして十分には行かないやうな口振りだつた。けれども彼女は(もう／＼決してと力を入れて)あんな商賈は厭だからかうして其人に隨いてゐるのだけれど、其の爲めに親の不興を買つて、着類を全部残らず持つて行かれてしまつた。さうして彼女は今言葉を盡して其着物の數や品や柄合やらを細かに委しく説明するのだつた。恰もそれらの品々が今眼の前にあるかの如く、さうしてその贅澤な着物に現在手を通してゐるかのやうな心持ちで話してゐる彼女は、その着物の話を幾らしても足りないといふやうな風だつた。さうして其事によつて今の見苦しい姿を飾らうかともしてゐるかのやうに。

「貴女はほんとに、さう言つちやなんだけれど、そんな御商賈をなすつた方に似氣なく着實な考へを持つてらつしやるんだわねえ、珍しいわ。」と稍々其話に飽いて來たやうに八木さんが言つた。

短い夏の日はそろ／＼強い光りを失ひつゝあつた。

「えゝもう話に合はないつていふんでせうねえ、夜の十二時過ぎにもなつて、ぐでん／＼に酔



月やあらぬ春や
昔の春ならぬわ
あ身とつはもじ
の身にして
今ならばつ
罵る
眠る
ころ

つばらつた姐さんの手を取つて、棲をとつて歸つて來る時なんか、ほんとに厭でしたわ、明日になつて(あら大變あたいの着物こんなに臺なしになつてゐるわ)なんてねえ、だらしがいいんですもの。私もうどんなに貧乏してもいいからつく／＼こんな商賈は厭だと思つてよ。」

さうして彼女は漸く今の吾が身に歸つたやうに、しほたれた寝巻の袖を撫で下し、瘦せた青い手を眺め上げながら「此地ぢやあねえ、私内密なんですよ、だから成るべく目に立たない様にしてるのよ、土地がせまいから煩さござんすからねえ、だけど私もどうなつたつていいわ!」と投げ出すやうに言つて再び横になりかけた。「どうせねえ、私達はいゝ目に遇ひつこないんですからねえ、ほんとに私のやうな者は罪が深いわ、人を瞞まさないやあ生きて行かないんですもの、私ねえ、旦那の奥さんや子供の事を思ふと濟まないと思つてよ、なんだか寂しくなるわ、私なんか未來は地獄よ……これから先だつて何處にどう流されて行くんだか……でも私も構はないわ。」

急ぎ足に日は落ちかけた。私は氣が付いてまたいつものやうに寝ながら遙かな空に目をやつた。莊嚴な夕日に彩られた種々の雲が、其處に懐しい想像の世界を又私に造りかけてゐた。思はず妙な所に落ちて行つた小雛の話を手繰り寄せて、(未來、小雛の魂、浮草……)といったやうなきれ／＼な詞を胸に泡だ／＼せながら、私はちいつゝ其雲に見入つた。

傍では八木さんが何か一言二言慰めるやうな言葉を言つてゐるやうだつた。併し私が思ふのは小雛は別に沈みかへつてゐるやうな様子でもなかつた。つまり彼女は自分の運命を流れるまゝに流れさせて置くといふ事は一種の安心を得てゐるのではないか? 其事を彼女自身では少しも意識しなかつたけれども。

其夜私は俄かに階下の一人の室に移る事になつた。さうして二人の女性に別れを告げた。け



れども其前に私は又八木さんから忘れる事の出来ぬ印象を受けたやうに思ふ——それは私の過敏になり過ぎた神経のせいだったかも知れないけれど。

夕方、八木さんは突然、

「旦那様はもうお歸りになつたんですか？」

と私に尋ねた。

「えい。」

「東京へ？まあさうですか。」

さうして暫く言葉がとぎれた。

「でも貴方々はどうござんすわねえ、さうして時々いらつしやられるんですもの、どつかへお勤めなすつてらつしやるんぢやないんですか？」

私は一寸返事に困つて。吾々の生活は決して世間並みの軌道を踏んではゐなかつた——

「えいまあ勤めてる事は勤めてるんですけども……」

「どちらへ？私なんだか貴女の旦那様にお目にかゝつた事があるやうな気がするんですよ。」

「なんだか宮川もそんな事を言つてましたわ。」と私は微笑んだ。さうして自分達の職業に就てはそれで話が外れたと思つた。けれども又話はもとに戻つた。で私はたゞ簡単に筆でする仕事だと答へた。

「あの……」と彼女は何かを思ひ出して来るやうに私の顔に目をそゝいで、「貴女も何かお書きになるんぢやないんですか？」

私は黙つて恥かしく笑つてゐた。

「さうでせう……？まあさうなんだわ、まあさうでしたか、それはどうも失禮しました。」と急



浪子の兵、
伊香保の魔物
魔物ウデヘ……
甘……

に彼女は調子を替へた。それが私には何だか彼女が氣に障つた事でもあるやうな風に響いた。
「まあさうでしたか、お楽しみですわねえ、私もこれから少しお弟子にでもして頂だかうかしら。」と何かしら彼女の調子は興奮して來た。

「病氣のお弟子にならして上げますわ。」

「御笑戯でせう、病氣の方なら私の方が博士だわ……」と笑ひながらも彼女は腹たゞしさに言つた。

「でも數に於て私の方が優つてますよ。」

「どこがお悪いんですか？」

「どこでも。どうせ結核性のなんでせうから……」と私は寂しく笑つた。

「そんな事はありませせんわ、そんな事はありませせんわ、今に御病氣が快くおなりなすつたら、貴女なんかどんな事でもお出來になるんですわ、腕を持つてらつしやるんですもの、えいもうぐんぐ御自分のなさりたい事がされるんですわ、御病氣だつてぐんぐ療りますわ、私なんか、私なんかこそ……」

彼女は息切れがして來た、私はそれを感じた、私の胸も共に波立ち、血が逆流した。私は黙つた、私が何か言へば益々其興奮を強め、焦だゝせるだけだと思つたから。

(この人の心は惱んでゐる!)と私は思つた。(さうして挑んでゐる、自分の運命に向つて挑んでゐる、この人は今この人に與へられてゐるものに満足出來ないのだ)と。さうしてある反抗するやうな、人を詰るやうな眼の意味が解けたやうな氣がした。彼女の魂は、彼女を出し抜いて其病氣と、其近づく死! (この場合この言葉は恐ろしい)とを密かに知つてゐる。さうして彼女の知らぬ間に彼女の眼は云ふ。(何故私は死ななければならぬのです? 私はまだ熱い戀も知らない、愛も知らない、それなのに何故



私にばかり處女の春を惜しむのですか？何故この何ものにも替へられない若い血と肉とを恐ろしい病魔の餌食としなければならないのですか？何故人世は私の袂の影に其面を潜めるのか、何故、何故？

其夕べは私も彼女も熱が九度を遙かに超えてゐた。

「御覧なさい、あんまり私を嘲つたものだから……貴女のは罰が當つたのよ。」と私は靜かに笑戲を言つた。彼女も今は寂しく笑つてゐた。

さうして附添ひの人達が階下に荷物など運んでる間に、私はぼつ／＼と話をはじめた。彼女の傷に觸らないやうにと要心しながら、其病氣を私が察してゐるといふ事を悟られないやうにと苦心しながら、併しやつぱり其病氣に就て話した。それは尤も私に取つて我が事でもあつた。私はそれらの多くの不幸な人々の話をした。私はどうかして彼女の焦だつてゐる心を（それはたゞ不幸を加へるばかりである）和げたいと思つた。さうして假令大海に投じた粟粒ほどのものでも、此同じ患ひの者から慰めを與へ得られるやうにと願つた。その希みは幾らか達しられたやうに見えた、私が此春肋膜の水を取る爲めに或る呼吸器の病院に入院して、そして一ヶ月餘りて入浴を許されるやうになつた時、同じ浴室に入つてゐた附添ひに來てゐる一人の母親が、私を見てさも羨しさうに又幾らか妬ましさうに（お湯に入られるやうになつては結構ですね、うちはどうせ……）と言つて聲を落した時には、私はなんだか自分が快くなつたのが濟まないやうな氣がしたと話した時、彼女の母親の目にも同じやうな涙が光つてゐるのを私はちらと見た。

「貴女だつて、私だつてあの櫻が咲く時分には」と青々と繁つた庭の葉櫻を私は指さした。

「此院を出られるやうになるでせうよ、まあお互に辛棒しませうねえ。」

笑ひながらさう言つて私は別れを告げた。それから一と月ばかりの間、私は自分の温室を一



歩も外に出る事が出来なかつた。時々看護婦や附添ひの者を通して小雛や八木さんの消息を聞いた。小雛は少し快くなると小使部屋で隠れてお芋を焼いて喰べたり、外出して何かを喰べたりして又一度失敗つたが、間もなく退院する事が出来た。それから暫く經つと、旦那から金が出なくなつたので此土地にはもう居ないと誰かと噂されてゐたやうだつた。

八木さんも一と月ばかりすると退院した。勿論快くなつてゐはなかつた、病院の近くに母娘で家を借りて住んで、時々母親が藥を取りに見えてゐた。秋も深くなつた。さうして寂びしい母娘はまた其家を閉ぢて生れ故郷の村へと冬籠りに行つた。

春はまた環つて來た。北國の空ながら櫻は將に咲かうとしてゐる。なんといふ青い空だらう！なんといふ柔かい白雲だらう！今は漸くに私の病も癒えかけた。葉櫻を指して假初めに約束した如く、あの枯枝が再び花となる時分には、私も此院を出られるだらう。それにしても一時人世の落伍者となつて、一樹の蔭に宿つたあの二人の女性はどうなつたらう。この世に於てもあの世に於ても自分の榮えを期待しなかつた魂と生の執着に宛もなくあの（何故私は死ななければならぬか？）の矢を放つ惨しい眼とは？（千九百十六年三月病床にて）

